

三日月

舌足らずな三日月
僕が見上げるものに
糸を繫ぐ

歩き疲れ
生きていることの、孤立した
証として浮ぶ三日月

父なるもの
母なるもの
その抱擁を微笑する三日月

ぼつりと
ただひとつ
僕の帰路に浮ぶ三日月

真昼に見渡した海原
結晶が光と交叉し
それらがざわめいているかのような

日常という凶器が
待ち構えている、と
それを通告せぬ三日月

現在という孤独者が
町裏の狭い影で
眠りを食い漁っている

三日月が浮んでいる
何十億年の我々の営みとは関わりなく
我々が持て余してきた時間とは関わりなく

成層圏の遙か向こう
粒子の抜け殻が黒く瀾み
感覚という名の離脱を操っている

三日月が浮んでいる

闇に紛れて忍び込む者が居る
それを見て見ぬふりをしたまま

厚顔無恥な臆病者たちが
訳知り顔で弁解を並べながら
後ろ向きに逃亡する

三日月自身は変わっていない
我々の居るこの星が変わっている
その意味において位置が変わっている

ふらふらとした酔いが
僕の嫌悪感を増幅する
黒く、どこまでも黒く

三日月が浮んでいる
孤独から逃走するために
雑然と置かれた無数の標識に見え隠れして

溶解しはじめたアスファルト
そこに足を沈ませて
僕はよろめき、吐く

三日月が浮んでいる

僕は見上げる
完結の無い別離の沼
その水面を

(2008.10.17)